意　見　陳　述　書

１．私は名古屋市で生まれ、名古屋市で育ちました。

２００３年に大阪市生まれの夫と結婚し、夫の職場がある千葉県に住むことになりました。私たち夫婦は仲人さんの縁（ゆかり）の地であった福島県伊達市を何度も訪れるようになり、やがて地元の方々とも親しくなって、福島の人たちの温かい人柄と豊かな自然に魅せられるようになりました。将来は福島県に移住し、終（つい）の棲家（すみか）は福島にしたいと夫婦で考えるようになりました。

２００８年３月夫が福島県伊達市に転勤することになり、長年の夢であった福島県での生活が実現しました。そのころ私たち夫婦には３人の子供がいました。決して裕福ではありませんでしたが、自然豊かな福島の地で子供たちの健やかな成長を見守りながら幸せな生活を送るようになっていきました。２年後の２０１０年には４人目の子供が生まれ、２０１１年２月には５人目を身ごもっていることが分かりました。私たち夫婦は４人の子供と平穏な暮らしを続けながら、生まれ来る命を待ちわびていました。福島の皆さんは、よそ者の私たち一家を温かく迎え入れて下さり、その頃には親兄弟よりも強い絆を築くことができていました。

２．２０１１年３月１１日、東日本大震災に伴って東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故が起きました。原発事故の影響が明らかにされない中、名古屋の実家に住む兄からの電話により放射能の恐怖を知りました。私たち夫婦と子供たちへの放射能の影響だけでなく、おなかの中にいる子や今後子供たちから生まれてくる子への影響を考えると、被曝者として一生逃れることのできない放射能の恐怖と不安に、心が押し潰（つぶ）されそうになりました。

３．私は、『これから生まれ来る命と、子供たちの命を守らなければ。』との一心で生まれ育った名古屋に避難することを決めました。私たちが終（つい）の棲家（すみか）と想い定めた福島を出ることにはとても抵抗を感じましたが、『いつか戻れる。』という気持ちで、福島で親しくなった人たちに別れを告げることなく身の回りの物だけを車に乗せて福島の自宅を出ました。地元で手に入らないガソリンを入れる為に山形の知人宅へ一旦避難し、１週間余りかけてようやく名古屋にたどり着きました。

４．当初は一家全員で避難することを考えましたが、夫は仕事のため福島に残らざるを得ず、やむなく私一人で４人の子供を連れて避難することになりました。１週間余り

かかってたどり着いた名古屋の親族の家では、私と４人の子供は出来るだけ周りに迷惑をかけないように気を遣い、不安や疲れを見せないよう必死に生活をしていました。

このような気苦労のせいか、名古屋へ来て１週間ぐらいした時から子供の体調が悪くなりました。病院にかかろうとしても、私たち警戒区域外からの避難者には医療費を無料にできないと言われました。『私達が必死に避難してきた事は間違いだったのだろうか？』という想いが私の中で強くなるばかりでした。しかし、テレビや新聞によって血の気が引くような放射能の深刻な被害が次々と報道され、そのたびに、決して私たちの避難は間違っていなかったと自分自身に言い聞かせたものです。

５．避難後は毎日決断を迫られることばかりでした。子供の小学校はどうするのか、幼稚園はどうするのか、出産はどうするのか、住所はそのままにしていてよいのか、いつまで名古屋に居るのか、福島でやる事になっていた町内の役はどうするのか・・・。毎日次々と決断を迫られる中で、とりあえず子供たちを受け入れてもらった学校や幼稚園の行事を忘れてしまい、子供に悲しい思いをさせてしまうことも度々ありました。

また、福島に残って生活する夫と電話連絡をとると、私たちだけを避難させた事を周りから責められること、明かりのついていない家へ帰ることの切なさ、震災の被災地へ行き被害を目の当たりにして言葉が出ないことなどを聞かされ、段々と電話口の主人の声がか細くなっていき、一人福島で暮らす夫がとても心配になる状態でした。放射能の健康被害に対する不安もあり、夫にも早く避難をするよう促していました。

６．４月の末には３人目の子である長男の体調が悪くなり、毎日４１度の熱を出しましたが解熱剤は効きませんでした。いくつかの病院で診てもらった結果、川崎病である事が分かり、その場で入院させてすぐに治療を開始しました。家で待つ３人の子供たちの事が心配になって親族に電話を掛けると、他の子供達も全員熱を出し、吐いているとのことでした。親族に迷惑をかけているという事が何よりも申し訳なく、子供たちにも寂しい思いをさせることとなり、私は何をやっているのだろうと涙を流す日が増えていきました。

長男の入院を機に夫と電話で話す時間が増え、そのたびに早く名古屋への転勤を申し出てほしいと懇願しました、家族で一緒にいられるのが一番だと夫も会社に名古屋方面へ転勤を申し出てくれましたが、結果はダメでした。私はこのままでは親族に迷惑がかかるという想いと、これ以上気を遣って子育てを続けてはいけないという想いでいっぱいになってしまいました。段々自分の言っている事も支離滅裂になっていっ

ていたようで、夫に離婚か仕事を辞めるかの選択を迫ることもありました。今考えるとこの頃から私の精神は段々と壊れていっていたのかもしれません。

7．結局夫は会社を辞める決断をして、次の仕事の当てもないまま名古屋に来てくれることになりました。１４年もの間全力を傾けてやってきた仕事を辞める覚悟がどれほどのものだったか、その時の私には理解することもできませんでした。仕事を辞めて家族を守る事を選んだ夫には、どれだけ辛い思いをさせただろうと、今でも申し訳ない気持ちと感謝の気持ちで胸が締め付けられる思いです。

そのころには、親族の家で居候として世話になる生活は限界に達していました。親族は嫌味一つ言いませんでしたが、子供４人に妊婦を突然抱える事になった親族の大変さを思えば、肩身の狭い想いは日増しに強くなっていました。

その結果、親族には何も言わないまま、子供たちを連れて世話になっている親族の家を飛び出してしまいました。

8．仕事を辞めて名古屋駅に着いた夫と再会した私は、親族の家を出てきてしまったので今日寝る所がない事を夫に告げました。「今日どうするの？」という夫の一言を聞いた途端、張りつめていた私の精神は壊れてしまいました。その後のことは何も覚えていませんが、気がついた時には中区の東別院の辺りで夫が私の腕を掴んでいました。

その後、区役所に行き、夫が涙を流しながら、「どこでもいいので雨風がしのげるところはありませんか？」と職員の方に話しているのを、私はただ呆然と見ているだけでした。区役所のお世話で何とか寝泊まりできる場所を世話していただけたこともはっきりとは憶えていません。

私は、子育ても、家事も、生きる事さえも嫌になり、その頃から、子供の話しかける声にも反応もできず、夫が買ってきてくれる食事にも手を付けられず、夜になると私を責める声が幻聴として聞こえてきて、それから逃げたくて「死にたい！」と叫びながら、家を飛び出す毎日が続きました。いつも夫が私を探し出して家まで連れて帰ってくれましたが、その夫にさえ私を責めているように思えて怒鳴り散らし、手を上げた事もあります。子供たちに対する感情のコントロールが出来なくなった私は、子供たちを怒鳴り、虐待したこともあります。私の異常な状態はなかなか収まる事はなく、ほぼ２ヶ月このような状態が続きました。夫の勧めで病院にも掛かりましたが、妊娠中であるため薬を飲むことができず、辛い時間だけが過ぎていきました。こんな時間が永遠に続くのではないかと不安と恐怖が襲って来ました。やがてそのような症

状は軽くなりましたが、今でも子供たちは私が怒った顔をするだけで、顔は強張り身体が固まってしまいます。

9．私たち家族は、終の棲家と思い定めて福島へ移り住みました。私たちのその想いも、抱いていた夢も、子供たちの未来も、東京電力福島第一原子力発電所の事故によりすべて奪われました。希望を奪われただけではなく、生涯にわたり健康への不安と恐怖を抱いて生きるという重荷も背負わされました。

私たちには健康で幸せに生きる権利があります。どうかこの裁判で原発事故の責任の所在を明らかにし、原発被災者の避難する権利を認め、私たちが被った損害の賠償を国と東京電力に命じて下さい。

平成２６年９月２６日

名古屋地方裁判所　御中

原　告